



武家の古都・鎌倉ニュース

◆ 主催／神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市世界遺産登録推進委員会 鎌倉市 ◆

近藤誠一さん(前文化庁長官) 講演「これからの鎌倉」

平成25年7月10日、近藤誠一前文化庁長官が、鎌倉生涯学習センターホールで「これからの鎌倉」をテーマに、講演と市民とのディスカッションを行いました。近藤前長官は、ユネスコ世界遺産委員会で、三保松原を含めた完全な形で富士山の世界遺産登録を成功させたあと、7月8日に退任された直後でしたが、「(4月30日に)鎌倉の『不記載』勧告を聞いたとき、必ず鎌倉に行って、皆さんとお話しようと思った」「周りを囲む木々、遠くにかすむ海、何か久しぶりに鎌倉の雰囲気というか匂いを感じた」など思いのたけを話されました。以下、講演要旨です。

◇鎌倉「不記載」勧告の理由

イコモス勧告は「不記載」だったが、鎌倉の武家政権の成立の地という歴史的価値は大きい。“The very great historic value”と、繰り返しイコモスは述べている。しかし、それを目に見える形で表現しているものは不十分というのが、勧告の「登録に値しない」と判断する決定的な要素だと思う。ヨーロッパ的考え方で、中世の都市には、城郭があり、政権と経済の拠点が、貿易の施設があり、当時の人々が住んでいたまちなみがある、と、彼らは考える。鎌倉の場合、源頼朝がどこに住んでいたか、執務をしていたか、そこがまだ考古学的・歴史的に証明されていない、見つからない、そこが恐らく決定的な要因ではないかと思う。

◇ヨーロッパと日本の価値基準の溝を埋める

ここ数年、私が石見銀山以来、日本の推薦登録に携わってきた経験からみると、日本人の価値観と、世界遺産条約のもとに明確に定められた基準の間にずれという溝がある。具体的に一番重要な点をいえば、登録基準の方は西洋的な価値観で、推薦している対象には価値を表現する物が現存し、常に目で見えて手で触れる、物質的な物であり、従って科学でそれを証明できるということに大変重きを置いている。これに対して日本では、必ずしも物がなくても、十分なストーリーがあり、信ずるに足る考証や記録があれば、その価値はあるということをずっと信じてきたし、将来も

そう考える。

今回、富士山の登録にあたって、三保松原は富士山の一部ではないと除外を勧告されたが、世界遺産委員会では、その目に見えないつながり、精神的価値が認められた。これは日本の価値を世界に認めさせていくための小さな1歩だと思う。このことは精神的な価値、意識といった日本的な価値観に、世界が目を開いていく流れを作って、世界が物質主義ではなく、精神主義にバランスを保っていく、そのような地球になっていくうえで、日本の果たすべき役割であり義務であると考えている。従って、短期的には相手の土俵に乗る、しかし常にチャンスをつかえて日本の価値観を主張し続けていく、理解する人、仲間を増やしていくことが大切だ。



「鎌倉は特別な青春時代の思い出」と語る近藤さん

◇鎌倉の再挑戦について

登録にあたってはあくまで書類で審査をする。そのために論理性と科学性が必要となれば、さらなる十分な調査と発掘をしなくてはならないことは明らかだ。それを進めていくうえで大事なことは、地元の方々の理解と熱意だ。半年や1年ではない、長期間かかるかもしれないこの作業に情熱を傾けて前に進んでいくためには、相当なエネルギーと夢と情熱とが必要だ。それをしっかりと確立し、自分のまちに誇りを持ち、もっと科学的に証明する材料をみつけようという意欲が積み重なって初めて、発掘調査も進むと思う。

それにより、鎌倉の持つ価値がより明らかになり、市民の皆さんや子供たちにより一層、より良く再認識され、そして世界にもそれが証明できるようになる。そうなることは、鎌倉の将来にとっていいのだと、自分たちの子や孫にとって必要だから、我々はそうするのだという、思いきった覚悟と情熱が必要だ。世界遺産登録の道というのは、マラソンに近い。マラソンには、持続力、目標に向かってあきらめずに進む情熱がなくてはならない。それらをしっかりと把握しつつ、前に進んでいくというのが、世界遺産に必要な要素だろうと思う。